

タイ語の「変化」表現の教え方：コーパスを用いた類義動詞表現の事例研究

著者	高橋 清子
雑誌名	神田外語大学紀要
号	29
ページ	343-366
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001397/

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

タイ語の「変化」表現の教え方：
コーパスを用いた類義動詞表現の事例研究

How to teach Thai Expressions of 'Change' to
Japanese-speaking Learners: A Corpus-based Study

高 橋 清 子

タイ語の「変化」表現の教え方： コーパスを用いた類義動詞表現の事例研究

高橋 清子

1. はじめに

何語であれ、動詞を核とする述語表現は最も基本的な文法構文の1つである。汎用性に優れた動詞述語表現全般に関する体系的な知識の有無がその言語の運用能力の高低を大方決めると言っても過言ではない。本稿は、神田外語大学アジア言語学科タイ語/英語専攻 1, 2 年生にタイ語の動詞述語表現を合理的かつ効率的に教える教科課程を確立することを究極の目的とし、同課程に適した教授法を探る事例研究として、変件事象を表す類義動詞群（変化動詞）と変化動詞を含む表現群（変化表現）に焦点を当て、その教え方について考える。タイ語文法教育の体系化のためには、概略、使用頻度や汎用性/生産性などの観点からタイ語の基本的な文法構文を同定し、それぞれの基本構文に関連する構文を同定し、それらの構文間の関係性を明示化し、それぞれの構文の導入や提示の仕方を考える、といった広範で大規模な基礎作業が必要であるが、本稿ではタイ語に多く見られる類義動詞表現の1種である変化表現に考察範囲を絞り、そうした作業の一部を模擬的に行ってみたい。具体的には、まず大規模電子コーパス Thai National Corpus (TNC) [<http://ling.arts.chula.ac.th/tnc2/>] から実際の使用例を多数収集し、その経験的データを質的および量的に分析する。次にその分析結果をもとに、どの抽象レベルの構文を選択し、どの学習段階で、どのような順序で、どの学習項目と関連させながら、例文も含めてどのような形で学習者に提示していくべきか、等々に

ついて考察する。最後に変化表現の教え方の試案を示す。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節で考察対象について説明し、第3節でコーパス調査の結果を報告し、第4節で変化表現の教え方を考察し、第5節で結語を述べる。¹

2. 考察対象

非タイ語母語話者のためのタイ語教育において初級段階で提示される動詞述語表現は大抵、単音節の単純動詞に項名詞句を添えたSV形（例：phôo yím 父が微笑む；bâan yàj 家大きい）やSVO(O)形（例：mêe khâaj khanôm (dèk) 母が菓子を(子供に)売る）である。しかし普通の談話では複合動詞（例：yàj-too 大きい）や動詞句連続体（例：khâaj khanôm môt 菓子を売って菓子が尽きる）が多用され、動詞は項名詞句を伴わないことも多い。またどの言語にも当てはまることだが、形式の固定化が進みその形式固有の意味が定着したいわゆる慣用表現（例：khâaj nâa (顔を売る>)恥をかく）の使用頻度も高い。さらにタイ語動詞の顕著な特徴の1つに類義語の多さがある。類義動詞（例：khâaj 売る、khâa 商う、camnâaj 販売する）を適切に使い分けるには、細かい弁別特徴を把握し、個々の動詞がどのように使用される傾向があるのかを知っておく必要がある。類義動詞表現の教授法開拓はタイ語教育の1つの大きな課題である。

タイ語の類義動詞の代表として変化動詞(変件事象を表す動詞)が挙げられる。本稿では、Miller and Johnson-Laird (1976: 79)の「change 変化」の定義を採用し、「変件事象」を「ある型や様式（ある程度一般化された抽象度の高いパタンの知覚）が、時間の経過に伴い、異なる型や様式になる事象」と定義する。自発的変

¹ 草稿の段階で富岡裕氏から疑問点や不正確な表現について指摘をいただいた。紙幅が限られているためその全てについて改善することは叶わなかったが、分かり易い記述に改めたところがある。記して感謝申し上げる。残る不備や誤りは筆者に責任がある。

化（変わる）であっても使役的变化（変える）であってもよい。本稿が考察対象とする変化動詞には単純動詞と複合動詞が含まれる。単純動詞は、นววรรณ พันธุเมธา (2001: 480, 819) の変化動詞リストと ราชบัณฑิตยสถาน (2013) が定義する変化動詞の語義を参考にして、6つの代表的な動詞(i) plian、(ii) pleɛŋ、(iii) prɛɛ、(iv) phǎn、(v) klaaj、(vi) pen を選定した。複合動詞は、それら6つの単純動詞を構成素とする複合動詞の中から TNC コーパスにおいて生起頻度が高い2つの代表的な動詞(vii) plian-pleɛŋ、(viii) phǎn-prɛɛ を選定した。(ii) pleɛŋ、(iv) phǎn、(v) klaaj、(vi) pen はいわゆる多義語である。特に(vi) pen は、後述するように、動的な変化事象（～になる）よりも静的な認定事象（～であると話者が認める）を表すことが多く、基本義が変化であるとは言えないため、変化動詞とは見なしづらい。しかし本稿では、基本義が何であれ、変化事象を表し得る動詞であればすべて変化動詞として扱う。本稿が定義する変化事象は抽象度が高く（言い換えれば描写の特定性が低く）かなり一般化された事象であることに注意されたい。位置変化動詞（例：log 下る）、方向変化動詞（例：hǎn 向きを変える）、形態変化動詞（例：tɛɛk 割れる）を含め、描写の特定性が比較的高く何らかの目立った特徴のある変化を表す動詞（例：phlík 翻す、phlát 交替する、sàp 取り替える、pràp-plian 調整変更する、pleɛŋ-phǎn 転化する、変換する、コンバートする、phlík-phǎn 事態が反対方向に急展開する、klàp-klaaj 掌を返すようにコロリと変わる、kɛɛ-khǎj-plian-pleɛŋ 改訂する）は本稿の考察対象に含まれない。

ある原因からある結果が生じるという話者の因果関係の把握を基盤とする個別的变化事象は動詞句連続体で表されるが（例：thúp cɛɛkan tɛɛk 花瓶を叩いて花瓶が割れる）、動詞句連続体の構成素として変化動詞が使われることがある（例：pleɛŋ rǎaŋ pen plaa 姿を改変して魚になる、魚に化ける）。また不定節（定性/節性が非常に低く相標識/モーダル標識などを含み得ない、名詞化形式に続く不定節

や複合語構成素の不定節) や関係節/補語節 (定性/節性が比較的高く相標識/モーダル標識などを含み得る、名詞句に埋め込まれた修飾節や名詞句/動詞句に埋め込まれたあるいは同格の補語節) の中で変化動詞が使われることもある。変化表現に限らず、タイ語の動詞表現は以下のように大きく3つのタイプに分類できる。本稿ではこの分類をもとに変化表現の統語形式を分析する。

I. 名詞句/動詞句の構成素の節表現

1. 不定節表現 (例: kaan plian-plɛɛn 変化; tua-prɛɛ 変数)。
2. 関係節/補語節表現 (例: phaasǎa thii prɛɛ paj 変化していく言語; rúan̄ thii naan plɛɛn rǎan̄ pen plaa 彼女が魚に化けた話; plian sathǎanápǎap khwǎn khǒɔŋ phúu-taaj nán háj klaaj pen phii banpháburút 移行してきて先祖霊になるようにその死人の魂の地位を替える、その死人の魂を先祖霊に変える)。

II. 単独の動詞 (単純動詞あるいは複合動詞) を含む単節の動詞述語表現 (例: plɛɛn rǎan̄ 姿を改変する、化ける; pen plaa 魚になる)。

III. 複数の動詞を含む単節の動詞述語表現。変化動詞同士の組み合わせの場合 (例: klaaj pen ʔaj 移行して気体になる、気化する)、第一動詞だけが変化動詞の場合 (例: phǎn nám khǎw kɛp kák ʔaw wáj naj phúuun-thii wǎan̄ 水を空地に移して溜めておく)、第二動詞以下に変化動詞を含む場合 (例: plɛɛ pen phaasǎa ʔanjrit 翻訳して英語になる、英語に訳す) がある。

I 名詞句/動詞句構成素には II 単独動詞述語あるいは III 動詞句連続体が含まれている。II/IIIに使われている名詞句に I が含まれることもある。

変化動詞は雑多な慣用表現の類にも使われる (例: prɛɛ-rúup (形を変える>) 体制を変える; 製材された; 火葬後、遺骨を、頭の方を西にして、人体の形に並べ

直すこと)。本来、複合語（語彙化を経て固有の語彙的/内容的意味を獲得した語）や文法構文（文法化を経て固有の文法的/機能的意味を獲得した構文）も広い意味での慣用表現の1種と見なすべきではあるが、本稿では便宜的に、典型的な複合語/文法構文ではない雑多な慣用表現を「雑多な慣用表現の類」と見なす。

3. コーパスを使った使用実態調査

TNC コーパスの検索機能を活用して、6つの単純動詞と2つの複合動詞それぞれの使用実態について調査した（検索日2016年4月5日）。各変化動詞の全トークン数（表1）と頻繁に連語として共起する語（表2）を調べ、さらに各動詞について無作為抽出した100トークンをもとに、学術的（ACADEMIC）談話ジャンルのトークン数の割合（表3）、各変化表現の統語形式タイプ（表4、表5）、各変化動詞を含む複合動詞および慣用表現（表6）を調べた。

今回調査した8つの変化動詞のTNCコーパス内のトークン数を表1に示す。

表1：各変化動詞のトークン数

(vi) pen～になる	517,125
(i) plian 替わる/替える	14,928
(vii) plian-plæŋ 変化する/変化させる	13,630
(ii) plæŋ 変わる/改変する	2,062
(v) klaaj 移行する/移行させる	1,366
(iii) præ 推移する/推移させる	1,193
(iv) phǎn 一部移る/一部移す	651
(viii) phǎn-præ 変転する/変転させる	327

各動詞に添えた語釈は筆者による。今回のコーパス調査からそれぞれの動詞の意味的および統語的特徴を読み取り、それらの弁別特徴を考え、基本レベルの意味になるべく近い短い訳語を選んだ。多義語の(ii) pleen、(iv) phãn、(v) klaaj、(vi) pen については、残念ながら意味ごとの検索ができないため、変化動詞用例に限ったトークン数は分からない。

(vi) pen のトークン数が特に多いのは、認定表現(「～であると認定する」というモーダルな意味を表す1種の文法構文)としての使用や雑多な慣用表現の構成素としての使用が多いからであろう。pen は、基本的には、類型や属性などを表す不定名詞(指示性が低く指示詞表現や類別詞表現などで限定できない名詞)を従える一項動詞(他動性の低い自動詞)である(例: pen khruu 教師になる、教師である)。²

表1から以下のことが分かる。第一に、「(vi) pen～になる」を除外すると、「(i) plian 替わる/替える」(14,928)と「(vii) plian-pleen 変化する/変化させる」(13,630)

² タイ語の出現/消滅/存在動詞(例: kàot 生じる、mòt 尽きる、mii 存在する)は一項動詞で、「出現/消滅/存在動詞+出現物/消滅物/存在物を表す不定名詞」という統語形式をとる(例: kàot panhãa 問題が起こる、mòt panhãa 問題が無くなる、mii panhãa 問題がある)。この事実から筆者は以下のように類推する。もともと pen は「pen+性状を表す不定名詞」(例: pen wát 風邪が現れる、風邪をひく)の形で性状の出現を表していたのではないかと、そして「dāj+数量名詞句」(例: (sàkkaràat) dāj cèt róaip hãa sip (ある紀元からの年は)750 が現れる、750 に達する)の形で数量の蓄積、出現を表す dāj (高橋・新里 2005; 高橋 2006; Takahashi 2008, 2011) と対照的な出現事象を表す動詞だったのではないかと。現代タイ語の pen は変化動詞の他、認定動詞としても機能する(例: (khãw) pen khruu (彼は) 教師になる、教師である)。この事実から筆者は pen の語義の歴史的变化を以下のように類推する。結果解釈(「推移の結果、性状が出現する」という解釈)の強化と意味の漂白化によって「性状の出現」から「変化」(変化とその結果状態の出現)へと移行し、さらに主観化(話者の主観的観点が語義に取り込まれる過程)を経て「認定」(推論を経て至った結論)を派生したのではないかと。話者が自らの経験的知識や状況証拠に基づいて主観的に「～である」と認定するときに使われる認定動詞の pen は判定詞(コンピュータ)の機能を果たすと言ってよい。ただし外延(包摂する集合の類名)を指示する機能しか持たない通常の判定詞ではなく、モーダルな意味を含みつつ内包(包摂する集合の属性)を記述する機能を持った判定詞、すなわち「言語化されないう推論過程を含み、話者が認定の権限を持っている状況で、自分の出した結論を責任を持って伝えるという話し手の態度を含意として持つ」判定詞である(沢田・コモンワニク 1993)。情報処理の観点から、pen は「slow/thought-like/analytic」(vs. 'fast/sensation-like/holistic') information processing (速い/知覚的/総合的な情報処理に対する)遅い/思考的/分析的な情報処理」と結びついた判定詞であると特徴付けることもできる(Takahashi and Shinzato 2003)。

のトークン数が他の変化動詞のトークン数に比べ桁違いに多い。使用頻度を典型性の指標とすれば、この2つの動詞がタイ語の変化動詞（一般化された変化事象を表す動詞）の典型であると言える。第二に、「(viii) *phǎn-præ* 変転する/変転させる」(327)と「(iv) *phǎn* 一部移る/一部移す」(651)のトークン数が他の変化動詞に比べて少ない。この2つの動詞は描写の特定性が比較的高いため、使用する場面が限定され、使用頻度が低いのであろう。「(iv) *phǎn* 一部移る/一部移す」が表す事象は状態変化と位置変化の混合事象であり、比較的具象度が高い。

表2にTNCコーパス内で各変化動詞と連語（直前あるいは直後に生起する語）として共起するトークン数（括弧内の数字）が特に多い語を示す。多義語である(ii) *plɛɛŋ*、(iv) *phǎn*、(v) *klaaj*、(vi) *pen*の「変化」以外の語義およびその語義で共起する語については、鍵括弧に入れて示した。*thii*は名詞、類名詞、類別詞、前置詞、名詞化形式（いわゆる関係節化形式および補語節化形式を含む）として機能する多義語/多機能語だが、変化動詞と共起するときは名詞化形式として機能している場合が多いので、語釈を「名詞化形式」とした。その他 *paj*、*maa*、*dāj*、*khǒŋ*なども同様に、変化動詞と共起するときに多く表される意味を示した。

表2：各変化動詞と頻繁に連語として共起する語

(i) <i>plian</i> 替わる/替える	<i>paj</i> 起動/継続相標識(2,612), <i>plàp</i> 調整する(1,188), <i>chúu</i> 名前(470), <i>sii</i> 色(219), <i>phrúttikam</i> 行動(219), <i>sûa-phâa</i> 服(206)
(ii) <i>plɛɛŋ</i> 変わる/改変する [区画]	<i>kaan</i> 名詞化形式(209), <i>pen</i> ~になる(151), [<i>thii din</i> 土地(119)], <i>râaŋ</i> 姿(119), <i>siaŋ</i> 声(66), <i>phêet</i> 性別(62), <i>chǒom</i> 姿(59), <i>khruaŋ-mǎaj</i> 記号(56)
(iii) <i>pree</i> 推移する/推移させる	<i>kaan</i> 名詞化形式(392), <i>saphâap</i> 状態(284), <i>paj</i> 起動/継続相標識(125), <i>pen</i> ~になる(83), <i>càʔ</i> 至近相標識/非現実モーダル標識(78), <i>plian</i> 替わる/替える(68), <i>thii</i> 名詞化形式(64)

(iv) *phăn* 一部移る/ *phlík* 翻す(113), *kaan* 名詞化形式(55), *nám* 水(55), *ηən* お金(56), *tua zəeŋ* 一部移す [経過す 自分自身(40), [*bua* 蓮(39)], *thii* 名詞化形式(31), *pleeŋ* 変わる/改変する、蓮の名称] (31)

(v) *klaaj* 移行する/ *maa* 起動/継続相標識(590), *dáj* 起動相標識/実現モーダル標識(177), 移行させる [～の *râaŋ* 形体(127), *càz* 至近相標識/非現実モーダル標識(122), [重複記号 ような] (104)], *saphâap* 状態(101), *phan* 品種(84), *kɔ́* 断定モーダル標識/談話標識 (69), *paj* 起動/継続相標識(61), *kaan* 名詞化形式(57), *thii* 名詞化形式(50)

(vi) *pen* ～になる [*húaŋ* 気がかり(2,249)], *klaaj* 移行する (823), [*rúuppátham* 具体(690)], [～である、生きて [*cáw-phâap* 主催者(437)], *kláp-klaaj* コロリと変わる(388)], [*laaj-lák* 文字 いる、～できる、(368)], [*bút-buntham* 養子 (349)], [*thii-phúŋ* 拠り所 (330)], [*tôn-hèet* 原 雑多な慣用表現の 因(317)], [*bèp-yàaŋ* 手本(310)], [*khon ráj khwaam sâamâat* 能力のない者 構成素] (304)], [*patipák* 敵(236)]

(vii) *plian-pleeŋ* 変 *kaan* 名詞化形式(7,476), *paj* 起動/継続相標識(1,543), *khóŋ* 属格標識 化する/変化させる (1,122), *khwaam* 名詞化形式(1,115), *thaan* 方向(866), *kêe-kháj* 改善する (277), *phrúttikam* 行動(212), *sâamâat* ～できる(138), *săŋkhom* 社会(134), *khrooŋ-sâaŋ* 構造(119)

(viii) *phăn-pree* 変転 *kaan* 名詞化形式(117), *paj* 起動/継続相標識(49), *khwaam* 名詞化形式(46) する/変転させる

「(i) *plian* 替わる/替える」は起動/継続相標識 *paj* との共起が圧倒的に多い。複合動詞「*práp-plian* 調整変更する」としての使用も多い。替えることが多い具体的なもの(名前、色、行動、服)を表す名詞との共起も多い。「(ii) *pleeŋ* 変わる/改変する」は名詞化形式 *kaan* や(vi) *pen* と共起することが多い。改変できる具体的なもの(姿、声、性別)を表す名詞との共起も多い。複合名詞「*khruaŋ-măaj-pleeŋ-siaŋ* 移調記号」としての使用も多い。「(iii) *pree* 推移する/推移させる」は名詞化形式 *kaan*、*thii* との共起が多い。推移事象に関係する「状態」を表す名詞や(vi) *pen* と共起することも多い。起動/継続相標識 *paj* との共起も多い。複合動詞「*plian-pree*

移り変わる/変える」としての使用も多い。「(iv) *phǎn* 一部移る/一部移す」は複合動詞「*phlík-phǎn* 事態が反対方向に急展開する」としての使用が多い。名詞化形式 *kaan*、*thii* との共起も多い。共起することが多い名詞は、他へ移して流れを転換させられる「水、お金」を表す名詞や、性格/役割/職業などを変えて轉身することがある「自分自身」を表す名詞である。複合動詞「*pleeŋ-phǎn* 変換する/変換させる」としての使用も多い。「(v) *klaaj* 移行する/移行させる」は起動/継続相標識 *maa*、*paj* と共起することが圧倒的に多い。移行事象に関係する「形体、状態、品種」を意味する名詞との共起も多い。相標識/モーダル標識 *dáj*、*càʔ*、*kô* と共起することが多いという目立った特徴がある。名詞化形式 *kaan*、*thii* との共起も多い。「(vi) *pen*～になる」は、先に述べた通り(v) *klaaj* との共起が多い。複合動詞「*klàp-klaaj* コロリと変わる」との共起が多いのは、*klàp-klaaj* が使われるときには必ずと言ってよいほどの高い頻度で「*klàp-klaaj+pen*～」という連語形になるからではなからうか。「(vii) *plian-pleeŋ* 変化する/変化させる」は名詞化形式 *kaan*、*khwaam* との共起が圧倒的に多い。*kaan plian-pleeŋ* はこの形式固有の意味(包括的/総称的な「変化」の意味)を持つ語彙化された名詞と見てよいであろう。起動/継続相標識 *paj* や属格標識 *khǒŋ* との共起も多い。もう1つの典型的変化動詞「(i) *plian* 替わる/替える」とは対照的に、抽象度の高い意味を表す名詞や動詞(方向、行動、社会、構造;改善する)との共起が多いことが特徴である。「行動」は具体的にも抽象的にも解釈できる概念なので、(i) *plian* と(vii) *plian-pleeŋ* のどちらともよく共起するのだろう。「(viii) *phǎn-pree* 変転する/変転させる」は名詞化形式 *kaan*、*khwaam* と共起することが多い。起動/継続相標識 *paj* との共起も多い。

無作為抽出した各変化動詞の100トークンを談話ジャンルごとに分類したところ、どの動詞も学術的談話(主観を極力排し、客観的描写に努め、理詰めで精緻な筆致の文章)によく使われていることが分かった。それぞれの学術的談話ジャ

ルの割合を表3に示す。

表3：無作為抽出した100トークンの学術的談話ジャンルの割合

(iii) preε 推移する/推移させる	100%
(vii) plian-plεεŋ 変化する/変化させる	100%
(iv) phǎn 一部移る/一部移す	83%
(ii) plεεŋ 変わる/改変する	81%
(viii) phǎn-preε 変転する/変転させる	80%
(v) klaaj 移行する/移行させる	67%
(vi) pen～になる	65%
(i) plian 替わる/替える	58%

(iii) preε と(vii) plian-plεεŋ は100トークンの全て(100%)が学術的談話ジャンルのトークンだった。最も学術的談話ジャンルの割合が低かった(i) plian でも半数以上の58トークン(58%)が学術的談話ジャンルのトークンだった。

100トークンの中で各変化動詞が、Ⅰ不定節表現(名詞句構成素)、Ⅱ単独の動詞を含む動詞述語表現(単独動詞述語)、Ⅲ複数の動詞を含む動詞述語表現(動詞句連続体)のどの統語形式タイプで出現していたかを表4に示す。表4の各欄には生起タイプそれぞれのトークン数と具体例を挙げた。Ⅰ～Ⅲのトークン数の合計が100にならないのは、雑多な慣用表現の類、本稿の考察対象でない複合動詞、語の区切りを誤って検索された用例、文字入力の間違いにより意味が不明確な用例などを除外しているからであり、また多義語の場合、「変化」以外の意味を表す用例も除外しているからである。(vi) penを除き、「一項動詞(変わる)用法

のトークン数：二項動詞（変える）用法のトークン数」を括弧内に示した。変化動詞がどのような動詞と共起していたかも鍵括弧内に示した。変化動詞に続く直示動詞「paj 行く, maa 来る」は起動/継続相標識として機能していると見なし、共起動詞とはしなかった。

表 4：各変化動詞 100 トークンの統語形式タイプ別のトークン数と具体例

	I 名詞句構成素	II 単独動詞述語	III 動詞句連続体
(i) plian 替わる/替える	3 วิธีการ <u>เปลี่ยน</u> ของชีวิตอย่าง รวดเร็ว	54 (25:29) บ้านเมืองจะ <u>เปลี่ยน</u> ; แม้จะ <u>เปลี่ยน</u> เรื่องคุยแล้ว	23 (12:11) ปัจจุบันช่อง 4 <u>เปลี่ยน</u> เป็นช่อง 9; ได้ <u>เปลี่ยน</u> การปกครองเป็นระบบ สังคมนิยม [+เป็น; เริ่ม+; พยายาม+]
(ii) pleen 変わる/改変する	2 งานสร้างบ้าน <u>แปลง</u> เมือง ของเรา	28 (3:25) เป็นประโยชน์ที่เกี่ยวข้องหรือ <u>แปลง</u> มาจากประโยชน์करรรู วาก; ต้องสามารถ <u>แปร</u> ข้อมูลให้เป็นข่าวสาร	24 (5:19) นางนุชมา <u>แปลง</u> เป็นชาย; สามารถ <u>แปลง</u> ร่างเป็นสัตว์ต่างๆ [+เป็น]
(iii) pree 推移する/推移さ せる	54 เป็นการ <u>แปร</u> ของภาษาไทย	28 (17:11) สิ่งต่างๆ ก็ยอม <u>แปร</u> ไป; ถ้าไม่ <u>แปร</u> ทำนองจะเป็นโน้ด ตัวคำสองตัว	12 (6:6) แม้จะ <u>แปร</u> เป็นศัตรู; และ <u>แปร</u> สภาพเป็นโรงเรียนราษฎร์ตาม มติคณะรัฐมนตรี [+เป็น; +ขยายออก; นำ+ +เป็น]
(iv) phǎn 一部移る/一部移 す	4 โครงการเงิน <u>ผัน</u> ซึ่งรัฐบาล จัดสรรเงินให้แก่ตำบล	28 (4:24) ทำให้งบประมาณของรัฐ <u>ผัน</u> ไปสู่กลุ่มคนที่มิอิทธิพลทาง เศรษฐกิจและการเมืองในเขต ชนบท; นักเรียนต้อง <u>ผัน</u> เสียง วรรณยุกต์เป็น	10 (2:8) ความอยากดังกล่าวก็ได้ <u>ผัน</u> เป็นการอยากมี ถูกในตอนหลัง; แล้วก็ <u>ผัน</u> ตัวเองเป็นคนขายในที่สุด [+เป็น; +เข้า/ออกมา/ขึ้นมา; เล่น+]

(v) klaaj 移行する/移行させる	4 ภายหลังเป็นวัฒนธรรม <u>กลาย</u>	10 (7:3) รูปร่างที่น่าจะ <u>กลาย</u> มาจาก อักษร กข; ก่อนจะ <u>กลาย</u> พันธุ์หรือสูญ หายไป	66 (55:11) อาจจะ <u>กลาย</u> เป็นชุมชนร้าง; และ <u>กลาย</u> สภาพเป็นมนุษย์ [+เป็น]
(vi) pen ～になる	0	2 พิลึกสี่ได้ <u>เป็น</u> ตัวอย่างของ วิทยาศาสตร์ที่มีความแม่นยำ	9 คิด <u>เป็น</u> ค่าเฉลี่ย 2.86; แบ่งการประชุม <u>เป็น</u> สองกลุ่ม [แปล+; เกิด+; ทิด+; ขยาย+; แบ่ง(+ออก)+; ประคิดปะต่อผสมเส+]
(vii) plian-plɛŋ 变化する/变化させる	45 เป็นการ <u>เปลี่ยนแปลง</u> อย่างดี	42 (22:20) มัก <u>เปลี่ยนแปลง</u> ได้ง่าย; สามารถ <u>เปลี่ยนแปลง</u> สิ่ง ต่างๆ ได้	1 (0:1) การ <u>เปลี่ยนแปลง</u> คุณสมบัติจากแบบดั้งเดิม มา <u>เป็น</u> แบบทันสมัยเป็นสิ่งที่ทำให้เกิด การพัฒนาขึ้น [+เป็น]
(viii) phǎn-prɛɛ 変転する/変転させる	51 จะเกิดความ <u>ผันแปร</u>	37 (36:1) อารมณ์ <u>ผันแปร</u> ง่าย; เราเรียกปรากฏการณ์ <u>ผันแปร</u> ความถี่อัลลีลในแบบนี้ว่า random genetic drift	1 (1:0) การเรียนรู้อาจจะไม่เกิดขึ้นอีกหรือถ้าเกิดขึ้น อาจ <u>ผันแปร</u> เป็นรูปอื่น [+เป็น; เกิด+]

(vi) pen 以外の動詞は I ～ III 全てのタイプで生起していた。pen は「～になる」という意味では I 名詞句構成素の用法がなかった。「(vii) plian-plɛŋ 变化する/变化させる」は III 動詞句連続体の二項動詞用例 (A が B を変化させ B が C になる) はあったが、III の一項動詞用例 (A が変化し C になる) はなかった。逆に「(viii) phǎn-prɛɛ 変転する/変転させる」は III の一項動詞用例 (A が変転し C になる) はあったが、III の二項動詞用例 (A が B を変転させ B が C になる) はなかった。変

化動詞がⅢの第一動詞として生起するとき、その後ろに続く動詞はほとんどが「pen～になる」だった。penは「翻訳する、生まれる、計算する、拡大する、分ける、寄せ集め繋ぎ合わせ混ぜ合わせる」という意味の動詞に続くとき、「～になる」という意味に解釈できた。

I名詞句構成素のトークン数が特に多いのは「(iii) pree 推移する/推移させる」(54)と「(viii) phǎn-pree 変転する/変転させる」(51)である。「(vii) plian-plɛɯ 変化する/変化させる」もI名詞句構成素(45)が多いが、II単独動詞述語(42)も同様に多い。II単独動詞述語のトークン数が特に多いのは「(i) plian 替わる/替える」(54)である。Ⅲ動詞句連続体のトークン数が特に多いのは「(v) klaaj 移行する/移行させる」(66)である。(v) klaajと(viii) phǎn-preeは一項動詞用法(移行する、変転する)のほうが多いが、(ii) plɛɯと(iv) phǎnは二項動詞用法(改変する、一部移す)のほうが多い。(i) plian、(iii) pree、(vii) plian-plɛɯは一項動詞用法(替わる、推移する、変化する)と二項動詞用法(替える、推移させる、変化させる)のトークン数にあまり差がない。

変化動詞の後ろに生起していた名詞の意味を表5に挙げる。変化動詞の後ろに名詞はなくとも、文脈から「何を変える/何になる」のかが明確であれば、鍵括弧の中に示した。前置詞句によって「何から変える/何からなる」あるいは「何へ変える」のかが明示されていれば、括弧の中に示した。「(iv) phǎn 一部移る/一部移す」の場合は、前置詞によって位置変化の起点(ある場所から)や着点(ある場所へ)が明示されていることがあったが、そうした起点/着点については省略する。

表 5 : 各変化動詞の後ろに生起していた名詞の意味

(i) plian ～を替える	何、生き方、方向、ソプラノ旋律の方向、像、行動、学生の行動、サービス受容者の行動、生活様式、これらの構造の形、社会民主党の名、話題、心、空気圧縮機から伸びる主な管、姿形、国道の種類、ある種の心の中の指針、人々の認知、環境、ごちなく抱く人、視点、様式（従来の様式から）、政策（アユタヤの政策から）、仕事、グループ、人生、自らの地位と役割（商業利益のみ追求するものからより国際社会への責任を果たすものへ）、古代クメール文字の形、統治形態、輸入システム、森、満足の応答（新たに生まれた兄弟への応答へ）、音のキー（相対音のキーへ）、文脈、利用の仕方、性別、教育と呼ばれるものの人気 [服、ドル通貨、牛肉]
(ii) plæŋ ～を改変する	街、電圧信号、入力信号、状態、アンケート調査への回答状況、座標規定システム、値、派生地図上の詳細な規定値、体、姿、音、財産、形、データ（レスター・データから）、借金、情報、下僕、状況、図表の構造（構造(1n)から）、意味、あの不完全な法的行為 [これらの方程式、仏歴、ゴミ]
(iii) præ ～を推移させる	このことに対する考えや理解、韻律の性質、音調、王の住処、現在、状態（クラブから）
(iv) phǎn ～を一部移す	語、お金、政府のお金、声調、考え、デザイン要素の点/線/面/体積、パターン、様式、通常様式（変化した様式へ）、偏見/不公平/恐怖、コック川/イン川/ナン川の水、ダムから放水された水、運輸（現在ある運輸網から）、エネルギー、内容、心中の内容、声、夢、たくさんの我々の夢、様々な法律や規則、体、自分自身、物語（ある物語からもう 1 つの物語へ、さらに多くの物語へ） [建築用語、様々な法規の条項、中国中央銀行法、憎しみ]
(v) klaaj ～を移行させる	姿、竜の性質、音、声調の音、品種、信仰、雷神のイメージ、状態、国籍
(vi) pen ～になる	丸い結晶、正確な科学の見本、英語、序/中/結が揃った短い物語、平均値 2.86、6 科目（4 科目から）、いくつかの部門、いくつかの種類、

2 グループ、1~5 レベル、机と椅子	
(vii) plian-plɛɛŋ ~を変化させる	生産、政治、経済と生産の構造、生産能力、統治制度、外部関係様式、書類の内容、様々な過程、成員面の要素、社会、様々なこと、統治、これらの施設、輸入関税、他の心的レベル、税徴収制度、自分の行動、資源の量と生産性、経済開発戦略、様々な通貨、バンコク都知事選出の決心、バンコク都知事選挙立候補者選出の決心、政治的共同体（民族集合形態から個人主義形態へ）、ロシアと同形態の統治/経済体制、才能
(viii) phǎn-prɛɛ ~を変転させる	頻度

変化動詞の前後に生起する連語（表 2）の特徴として言及した以下のことは、特に変化動詞の後ろに生起する名詞（表 5）についての特徴である。「(i) plian 替える」、「(ii) plɛɛŋ 改変する」が従える名詞の多くは具体的なものを表す。「(iii) prɛɛ 推移させる」が従える名詞の多くは「状態」を表す。「(iv) phǎn 一部移す」が従える名詞の多くは「水、お金、自分自身」を表す。「(v) klaaj 移行させる」が従える名詞の多くは「形体、状態、品種」を表す。「(vii) plian-plɛɛŋ 変化させる」が従える名詞の多くは抽象的なものを表す。

นววรรณ พันธุเมธา (2001: 480, 819) は、自発的变化（変わる）事象を表す一項動詞として plian、plian-plɛɛŋ、phǎn-phǎn、phòk-phǎn、klaaj を挙げ、使役的变化（変える）事象を表す二項動詞として plian、plɛɛŋ、prɛɛ、plian-plɛɛŋ、dát-plɛɛŋ、phlík-plɛɛŋ、bit-buan を挙げている。pen は変化動詞リストに挙げられていない。しかしそのような変化動詞の項構造（いわゆる自他形式）の分類は実際の言語使用を反映した分類とは言えない。本稿のコーパス調査から以下のことが分かった。

(vi) pen 以外の 7 つの変化動詞は一項動詞と二項動詞の両用（いわゆる自他同形

動詞) で使役的变化事象と自発的变化事象の両方を表す。それらの動詞は Thepkanjana (2000: 265–268)が「transitive causative verbs alternating with activity verbs 活動相一項動詞と交替する使役二項動詞」と呼ぶ種類あるいは「transitive causative verbs alternating with inchoative and stative verbs 起動相一項動詞および状態相一項動詞と交替する使役二項動詞」と呼ぶ種類のいずれかである。ただし典型的な使役二項動詞(他動性の高い他動詞)とは異なり、再帰中間態や中間態もどきの意味を表すことがある。(i) plian, (ii) plɛŋ, (iv) phǎn, (v) klaaj は「tua, kaaj 体、rûup, râaŋ, chõom 姿、形体、sathǎanáʔ 地位」といった何かの部分や属性を表す不定名詞を従え再帰中間態の意味を表す(例: klaaj rûup 形を変える)。(i) plian, (ii) plɛŋ, (iii) prɛɛ, (v) klaaj は「saphâap, saphaawáʔ 状態、状況」など全体的な状態や状況全般を表す不定名詞を従え中間態に似た意味を表す(例: prɛɛ saphâap 状況が変わる)。一方、(vi) pen は一項動詞(他動性の低い自動詞)で、自発的变化事象(～になる)と結果状態事象(～の状態にある、～である)を表す。

各変化動詞を含む複合動詞(本稿の考察対象である plian-plɛŋ と phǎn-prɛɛ 以外の複合動詞)と雑多な慣用表現の類の中で、100 トークンの中に複数(括弧内の数字)の用例が見つかったものを表6に示す。(i) plian, (iii) prɛɛ, (iv) phǎn, (vii) plian-plɛŋ, (viii) phǎn-prɛɛ には複数見つかった複合動詞がある。一方、(v) klaaj, (vi) pen には複数見つかった慣用表現がある。しかし(ii) plɛŋ にはそのどちらもなかった。

表 6：各変化動詞を含む複合動詞と慣用表現の例

	考察対象外の複合動詞	雑多な慣用表現の類
(i) plian 替わる/替える	práp-plian 調整変更する(11), plian-phàan 交替する(2)	
(ii) pleɛŋ 変わる/改変する		
(iii) prɛɛ 推移する/推移させる	plian-prɛɛ 替わり推移する/替わり推移させる(3)	
(iv) phǎn 一部移る/一部移す	phlík-phǎn 事態が反対方向に急展開する(15), pleɛŋ-phǎn 転化する、変換する、コンバートする(13), phǎn-phàan 経過する(2)	
(v) klaaj 移行する/移行させる		klaaj-klaaj~のような(4)
(vi) pen~になる		pen-paj 成り立つ(5), khwaam-pen-yùu 情勢、生活(2)
(vii) plian-pleɛŋ 変化する/変化させる	plian-pleɛŋ-kêɛ-khǎj 改訂する(2)	
(viii) phǎn-prɛɛ 変転する/変転させる	phǎn-prɛɛ-tèek-tàan 変転し分離する(5), phǎn-prɛɛ-plian-pleɛŋ 変転し変化する(2)	

4. 教え方の考察

学術的談話に多く使われる抽象度の高い変化する事象を表す動詞を初級段階で教える必要はない、と考えるのは早計である。なぜなら非タイ語母語話者にとっては、

ある程度抽象度の高い事象を表す動詞のほうが覚え易く、また使い勝手がよいからである。タイ社会で日常的に使われている動詞は概して具象度が高い事象を表し、描写の特定性が高い。例えば「投げる」であれば *yoon*、*paa*、*khwâaŋ*、*wiaŋ*、*khawiaŋ*、*thooj*、*phûŋ*、*sát*、*thôt*、*thín* など投げ方やその目的などによって数多くの動詞が使い分けられている。これらの動詞はどれも、知識語や専門用語などではなく、あくまでも人々が日常的に使っている動詞であり、タイ語の基本動詞であると言ってよい。タイの社会や文化をよく知らないタイ語学習者は、そうした意味区分の細かい数多くの動詞を場面に応じて適切に使いこなすことがなかなかできない。使用頻度が非常に高いものを除き、早期にそうした動詞の使い分けを習得することは難しいのである（そのため初級段階でそのような動詞を導入するときは、使用頻度が非常に高い少数の動詞を選んで教えざるを得ない）。むしろ初学者にとっては、ある程度抽象度の高い事象を表す動詞のほうがより広い場面で使え、有用性が高いとも言える。例えば、詳しく「*phlát phâa* 腰巻布を交替する、着替える」「*sáp thii* 場所を取り替える、入れ替える/入れ替わる」などと言うことができなくとも、大まかに「*plian phâa* 腰巻布を替える」「*plian thii* 場所を替える」とさえ言えれば、聞き手に大意は伝わる。

タイ語学習者はタイ語の動詞述語表現を数多く覚えなければならないが、順序立てて提示すると、よく使う表現から先に順序良く覚えられ、使える表現を着実に増やしていくことができる。提示の順番を決めるとき、以下の4つの原則が適用されるであろう。

1. 使用頻度が高く比較的単純な意味構造/統語構造の述語表現（構文）が先、そうでないものは後。
2. 使用頻度の高い動詞を含む述語表現が先、そうでないものは後。

3. 使用頻度の高い動詞を含む述語表現の中で、使用頻度の高い統語形式が先、そうではないものは後。
4. 使用頻度の低い動詞を含む述語表現の中で、使用頻度が高い慣用表現の類が先、そうではないものは後。

これらの原則を適用し、前節の調査結果を踏まえて、以下のように変化表現の提示の仕方を提案する。

初級で使用頻度の高い典型的変化動詞「(i) plian 替わる/替える、(vii) plian-plɛŋ 変化する/変化させる」を含む単純な表現（Ⅰ名詞句構成素、Ⅱ単独動詞述語）を導入し、中級で使用頻度のやや高い変化動詞「(ii) plɛŋ 変わる/改変する、(v) klaaj 移行する/移行させる」と「(vi) pen～になる」を含む生起頻度の高い表現（Ⅲ動詞句連続体）を導入し、上級で使用頻度の低い変化動詞「(iii) prɛɛ 推移する/推移させる、(iv) phǎn 一部移る/一部移す、(viii) phǎn-prɛɛ 変転する/変転させる」を含む雑多な表現（Ⅰ名詞句構成素、Ⅱ単独動詞述語、Ⅲ動詞句連続体）を導入する。各学習段階で導入する変化表現の具体例を表7に示す。

表7：各学習段階で導入する変化表現

初級	(i) plian を含む表現
	Ⅱ 独立存在物名詞句+plian(+起動相/継続相標識 paj/maa)
	(1) chǔu plian 名前+替わる「名前が(違う名前に)替わる」
	Ⅱ 主体名詞句+plian+対象名詞句
	(2) kháw plian ɲaan 彼+替える+仕事「彼は仕事を替える」
	(vii) plian-plɛŋ を含む表現
Ⅰ 名詞化形式+plian-plɛŋ	
(3) kaan plian-plɛŋ 名詞化形式+変化する「変化」	

	<p>II 独立存在物名詞句+<u>plian-plɛɛŋ</u>(+起動相/継続相標識 <u>pai/maa</u>)</p> <p>(4) sǎŋkhom plian-plɛɛŋ 社会+変化する「社会は変化する」</p> <p>II 主体名詞句+<u>plian-plɛɛŋ</u>+対象名詞句</p> <p>(5) ráttabaan plian-plɛɛŋ khrooŋ-sǎaŋ kaan pòkkrɔŋ 政府+変化させる+統治構造「政府は統治構造を変化させる」</p>
<p>中級</p>	<p>(ii) <i>plɛɛŋ</i>, (v) <i>klaaj</i>, (vi) <i>pen</i> を含む表現</p> <p>III 主体名詞句+<u>plɛɛŋ</u>+対象名詞句+<u>pen</u>+出現物名詞句</p> <p>(6) kháw plɛɛŋ khǎo-muun pen kháaw-sǎan 彼+改変する+データ+なる+情報「彼はデータを改変しデータが情報になる、彼はデータを情報に変える」</p> <p>III 主体名詞句+<u>klaaj</u>+<u>pen</u>+出現物名詞句</p> <p>(7) wátthanátham thaj klaaj pen wátthanátham phasǎm タイ文化+移行する+なる+混合文化「タイ文化は移行して混合文化になる、タイ文化は混合文化になる」</p> <p>III 主体名詞句+<u>klaaj</u>+不定名詞[姿/形/状態]+<u>pen</u>+出現物名詞句</p> <p>(8) nók-phírǎap klaaj ráaŋ pen manút 鳩+移行させる+姿+なる+人間「鳩は姿を移行させて人間になる、鳩は人間に化ける」</p>
<p>上級</p>	<p>(iv) <i>phǎn</i> を含む表現</p> <p>II 主体名詞句+<u>phǎn</u>+対象名詞句</p> <p>(9) nák-rian tǔŋ phǎn sǎaŋ-wannayúk pen 生徒+～なければならない+一部移す+声調+～できる「生徒は声調の音を移すことができなければならない、生徒は移調できなければならない」</p> <p>III 主体名詞句+<u>phǎn</u>+不定名詞[自身]+動詞句</p> <p>(10) kháw phǎn tua-ɔɛɛŋ maa tham ŋaan-khǎan 彼+一部移す+自身+起動相標識+する+書く仕事「彼は自身を移して物書きの仕事をする、彼は作家に転身する」</p> <p>(iii) <i>prɛɛ</i> を含む表現</p> <p>I 名詞化形式/主名詞+<u>prɛɛ</u></p> <p>(11) kaan prɛɛ bèp tòŋ-núaaŋ 名詞化形式+推移する+～式の+持続する「持続的推移」</p> <p>(viii) <i>phǎn-prɛɛ</i> を含む表現</p> <p>I 名詞化形式/主名詞+<u>phǎn-prɛɛ</u></p> <p>(12) kaan phǎn-prɛɛ khǔŋ ɔ̀atráa lɛ́ek-plian 名詞化形式+変転する+～の+率+両替する「為替レートの変動」</p>

<p>変化動詞と <i>pen</i> 非現実補語節 (～になるように) を含む表現</p> <p>II 主体名詞句+変化動詞(+対象名詞句)+非現実補語節化標識 <i>hâi</i>+<i>pen</i>+出現物名詞句</p> <p>(13) <i>khâw plɛɛj khôɔ-muun hâi pen khâaw-sâan</i> 彼+改変する+データ+～ように+なる+情報「彼は情報になるようにデータを改変する、彼はデータを情報に変える」</p> <p>変化動詞と起点/着点前置詞句 (～から、～へ) を含む表現</p> <p>II/III 主体名詞句+変化動詞(+対象名詞句)+起点前置詞 <i>càak</i>+既存物名詞句(+非現実補語節化標識 <i>hâi</i>)+ <i>pen</i>+出現物名詞句</p> <p>(14) <i>khâw plɛɛj khôɔ-muun càak khôɔ-muun A hâi pen khôɔ-muun B</i> 「彼は B データになるようにデータを A データから改変する、彼はデータを A データから B データに変える」</p> <p>II 主体名詞句+変化動詞(+対象名詞句)+起点前置詞 <i>càak</i>+変化前状況名詞句+着点前置詞 <i>van/sùu</i>+変化後状況名詞句</p> <p>(15) <i>rûup-bèɛp kaan rian-rúu plian càak kaan rian bèɛp sùŋ nâa naj rooŋ-rian sùu kaan rian-rúu càak rayáʔ klaj pháan kaan sùtu-sáan thaŋ daaw-thiam</i> 「学びの形態は学校における対面学習から人工衛星通信を通じた遠隔学習へと替わる」</p>
--

初級では、I 名詞句構成素と II 単独動詞述語の表現を導入する。単独動詞述語表現については、(i) *plian* と (vii) *plian-plɛɛj* の一項動詞用法(1)(4)と二項動詞用法(2)(5)の両方を提示し、(vi) *pen* を除き、変化動詞は自他同形であることを教える。このとき、位置変化/方向変化/形態変化動詞などにも自他同形があることに言及し(例：*khlûan* 動く、動かす；*mũn* 回る、回す；*pàət* 開く、開ける；*hàk* 折れる、折る)、自他同形動詞が表す事象には共通して次のような特徴があることを教える。①原因(対象/受影物の状態変化を引き起こす主体/動作主の動きや自然の力)と結果(対象/受影物が被る状態変化)の両者に焦点が当てられている。②対象/受影物の状態変化を引き起こすのは対象/受影物の外部にあるもの(主体/動作主の動きや自然の力)である。名詞句構成素表現については、包括的/総称的な変化の意味を表す名詞化表現(3)を教える。

中級では、Ⅲ動詞句連続体の表現とⅢの慣用的用法（変化動詞と不定名詞との共起形）を導入する。まず(vi) pen を従える(ii) plɛɛŋ の二項動詞用法(6)を教え、次に(vi) pen を従える(v) klaaj の一項動詞用法(7)と、(ii) plɛɛŋ / (v) klaaj が不定名詞を従える慣用的な二項動詞用法(8)を教える。

上級では、(vi) pen 以外の動詞を第二動詞とするⅢ動詞句連続体の表現、修飾要素を伴う複雑なⅠ名詞句構成素の表現、前置詞句や補語節を伴う複雑なⅡ単独動詞述語とⅢ動詞句連続体の表現を導入する。(iv) phǎn については、通常の二項動詞用法(9)を教えた後、不定名詞「自身」を従える二項動詞用法（「転身する」を意味する慣用的用法）のときには、(vi) pen 以外の動詞が続く表現(10)が多いことを教える。(iii) prɛɛ と(viii) phǎn-prɛɛ については、様々な修飾要素が添えられた名詞化表現(11)(12)を教える。さらに、起点/着点前置詞句や非現実補語節を含む表現(13)(14)を教える。余裕があれば、より特定性の高い変化事象を表す様々な動詞（例：phlăt 交替する、sàp 取り替える）を紹介し、それらを含む表現の各々の特徴を説明するとよい。

5. おわりに

タイ語の動詞述語表現を日本語母語話者の学習者に教えるとき、タイ語動詞の日本語訳といくつかの例文を提示するだけでは、実際の言語使用においてその表現をどのように使うべきか、またどのように応用して使えるのかが分からず、結局その表現の使い方の習得に繋がらない。本稿では類義動詞表現の代表として変化表現を取り上げ、その合理的かつ効率的な教え方を探求した。1つの小さな、しかし意欲的な、事例研究である。本稿の試みが日本の大学におけるタイ語教育の発展に多少なりとも資することを願う。

参考文献

〈日本語〉

- 沢田奈保子・コモンワニック, カモンオーン. 1993. 「名詞述語文の日・タイ対照研究：認知語用論的観点から」 『言語研究』 103, 92–116.
- 高橋清子. 2006. 「「出現」から「実現」へ：非特定化と特定化の両者を伴う文法化」 『日本認知言語学会論文集』 6, 193–203.
- 高橋清子・新里留美子. 2005. 「日本語とタイ語の出現動詞の文法化」 『日本認知言語学会論文集』 5, 197–207.

〈英語〉

- Miller, George A. and Philip N. Johnson-Laird. 1976. *Language and Perception*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takahashi, Kiyoko. 2008. Grammaticalization paths of the Thai verb /dây/: A corpus-based study. In Sidwell, Paul and Uri Tadmor (eds.) *SEALS XVI: Papers from the 16th meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (2006)*, 121–133. Canberra: Pacific Linguistics.
- Takahashi, Kiyoko. 2011. The evolution of polyfunctionality of /dây/ construction in Thai: Split patterns of possibility-related modal concepts. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 4.1, 147–165.
- Takahashi, Kiyoko and Rumiko Shinzato. 2003. On Thai copulas, /khuu/ and /pen/: A cognitive approach. In *the Proceedings of the Second Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistics: Discourse and Cognitive Perspectives on Human Language, June 7-8, 2003*, 131–145.

Thepkanjana, Kingkarn. 2000. Lexical causatives in Thai. In Foolen, Ad and Frederike van der Leek (eds.) *Constructions in Cognitive Linguistics*, 259–281. Amsterdam: John Benjamins.

〈タイ語〉

นววรรณ พันธุเมธา. 2001. *คลังคำ*. กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์อมรินทร์.

ราชบัณฑิตยสถาน (ed). 2013. *พจนานุกรม ฉบับราชบัณฑิตยสถาน พ.ศ. ๒๕๕๔*.

กรุงเทพฯ: ราชบัณฑิตยสถาน.